

優秀賞

五年間のあいさつを

香川県 玉藻中学校 二年
多田 夏希

「おはよう」と、いつもあいさつをしてくれるおばあちゃんがいた。雨の日も晴れの日も、変わらない優しい声。名前も住所も知らないけれど、私はそのおばあちゃんが好きだった。

おばあちゃんとの出会いは、小学生のときだ。入学して初めての登校日から、あいさつをしてくれていた。横断歩道やよく車が通る道、ときにはごみ拾いをしながらあいさつをしてくれた。人見知りな私は緊張していたのと、周りの人があいさつを返していなかったりもしたので、あいさつをしなかった。

そして、それが習慣づいてしまい、私はおばあちゃんにあいさつを返さなくなった。五年生になるまで。

5年生になり、みんなが委員会に入らなくてはならなくなった。そこで私は、友達と計画委員会に入った。主な仕事は、率先してあいさつをする、あいさつがすばらしい人を見つけお昼の放送で発表する、などだ。私は毎日率先してあいさつをしていたら、いつの間にか自然とあいさつができるようになった。

しかし、おばあちゃんにはできなかった。今まで5年もの間、あいさつを無視してきたのに、今さらあいさつを返すなんておばあちゃんはどう思うだろうか、と考えてしまった。無視されたらどうしようという心配と、恥ずかしさが入り混じり、複雑な気持ちで胸がいっぱいになり、あいさつができなかった。

そんなある日、私の前を歩いていた1年生の男の子が、おばあちゃんにあいさつをしていた。元気な声で「おはようございまーす!」と言っていた。

(この子すごいな、お昼の放送で発表したいな) と思っていたとき、ふとおばあちゃんの顔を見た。するとおばあちゃんは、満面の笑みで男の子にあいさつを返していた。

私はこの笑顔を見て、今まで自分がしていたことを恥じた。周りの人に流されてあいさつを無視していたなんて、と深く反省し、その日から私はあいさつを返すようになった。中学生になっても。

そして、ある日あいさつをしたら、「今日もいいあいさつだね。」とほめてくれた。だから、明日もがんばろうと思った。

なのに次の日、おばあちゃんの姿はなかった。毎日いたのに急にいなくなると心配になり、以前おばあちゃんと親しげに話していた方を見かけたので、聞いてみた。すると、

「昨日の昼に倒れてね、亡くなってしまったんよ。持病があったからね。」

そんな驚きの答えが返ってきた。やっと、おばあちゃんにあいさつできるようになったのに。とても悲しかった。おばあちゃんのおかげであいさつが好きになったから、ありがとうを伝えたくった。でも、それは叶わなかった。もう二度と会えないから。

もう二度と、おばあちゃんの「おはよう」は聞けない。本当に悲しい。でもあいさつをすれば、おばあちゃんを思い出せる。だから私は、あいさつをがんばれる。あのとき言えなかった「ありがとう」があるから、私はありがとうを伝えられる。感謝しかない。この思い出は宝物だ。だから、忘れないためにもがんばるんだ。そう私は心に決めた。

おばあちゃん、見ていてね。がんばるから。おばあちゃんの「おはよう」、忘れないよ。ありがとう。